

29.

618.198-006.46

男子乳癌ノ1例及ビ本邦男子乳癌ノ統計的觀察

岡山醫科大學津田外科教室(主任津田誠次教授)

助手 醫學士 岡 本 繁

[昭和17年2月21日受稿]

第1章 緒論

乳腺腫瘍ハ其ノ良性ナルモノニハ纖維腫、腺腫、纖維腺腫、内被細胞腫等ガアリ、悪性ナルモノニハ、肉腫及ビ癌腫ガ擧ゲラレル。就中乳癌ハ最モ吾人ノ關心ヲ持ツモノニシテ、乳腺腫瘍ノ80乃至85%ヲ占メ其ノ頻度ハ胃癌、子宮癌ニ次ギ第3位ヲ占ム。主トシテ女子ヲ犯シ、男子ニ發ルハ極メテ稀ナリ。Schuchhardt, Williams, Finsterer等ハ男性乳腺腫瘍ハ總テノ乳腺腫瘍中ノ1乃至1.6%ヲ占ムルニ過ギズト言ヘリ。泰西ニ於テハ1880年E.Gurltガ女子乳癌1432例ニ對シ男子乳癌8例ヲ發表シ僅カ0.5%ニ過ギズト報告シ、其ノ後Chennet, Eliasscheff, Schuchhardt等ノ統計的觀察有リ、1919年Fesslerハ文獻中ヨリ700例ニ就キ報告シ、1932年Kleinschmidtニ依リ1000例以上ノ發表ヲ見ル。然ルニ本邦ニ於テハ其ノ報告例極メテ尠ク昭和9年志田原群三氏ハ本邦男子乳癌35例中記載ノ明カナル26例ニ就キ統計的觀察ヲ試ミテキル。其ノ後余ノ文獻ヨリ蒐集シ得タル症例數6例、即チ從來我が國ニテ報告サレタル男子乳癌ハ41例ナリ。余ハ最近津田外科教室ニ於テ、右側乳嘴附近ノ潰瘍形成ヲ主訴トシテ訪レタル1男子乳癌ヲ經驗シ更ニ之ニ1例ヲ加ヘントスルモノナリ。

第2章 自家症例

患者 林某 62歳 農業

入院 昭和14年2月3日

退院 昭和14年3月17日

主訴 右側乳嘴部潰瘍性腫瘍

家族歴： 祖父母既ニ死亡、父ハ64歳ニテ老衰死シ、母ハ78歳デ腎臟病ニテ死亡セリ。同胞5人患者ハ末子ニテ長兄ハ76歳ニテ健在、他ハ肺炎、赤痢及ビ肝臟病ニテ既ニ他界セリ。妻ハ39歳ノ時婦人科の疾患ニテ不幸ニモ死亡、子供ハ6人、内第4子ハ3歳ニテ死亡、末子ハ生後間モナク死亡セル外他ハ健在ナリ。即チ遺傳的關係トシテ痛結核等ヲ認メズ。

既往歴： 患者ハ正常分娩兒ニテ母乳榮養幼年時代概シテ健康、18歳ニテ結婚セリ。25歳ノ時何か不明ノ熱性疾患ニ罹リ其ノ後十二指腸蟲病ノ診斷ヲ受ケ凡ソ半箇年間治療ヲ受ケタリ。40歳ノ時左脚ノ神經痛ニ惱ミ數回ノ注射ニテ輕快セリ。多少喫煙スルモ飲酒セズ。

現病歴： 15、6歳ノ頃兩側乳腺ガ肥大シ中ニクリクリシタ腫瘤様ノ物ヲ認メタリ。尙ホ右側乳嘴ハ生來陷凹セリト。約2年前別ニ誘因ナシニ、右側乳嘴内方約2cmノ部ニ皮下ニ豌豆大ノ硬キ腫瘤ヲ生ジ、次第ニ増大シ時々刺痛ヲ訴フ。約8箇月前該部ノ皮膚癢赤ヲ來シ、疼痛増加シ先ノ腫瘤ガ自潰シ血性膿汁性ノ液ヲ出シタルモ疼痛ハ依然去ラズ、ダンダン増加シ、殊ニ上肢運動ニ際シ、右側胸痛ヲ訴フルニ到リタリ。又其ノ頃右側乳嘴外上部ニ同様ノ硬キ腫瘤現レ次第ニ肥大シ今日ニ

及ブ。

現症： 體格榮養中等度，顔貌正常，皮膚及ビ結膜=貧血ヲ認メズ。瞳孔正圓形ニシテ，對光反應迅速ナリ。脈搏整調，緊張良ニシテ，頻數ナラズ。咳嗽時々アリテ粘稠黃白色ノ喀痰ヲ中等量排出ス。便通1日1回心臟=異常ナク，肺臓ハ打診ニテ著變ナキモ聽診ニテ後部殊ニ右側ニ乾性囉音ヲ聽ク。尿糞異常ナシ。

血液所見

赤血球 500萬

白血球 1,0000

{	「エオジン」嗜好性	0.5%
	中性多形核	70.5%
	淋巴球	27%
	大單核及ビ移行型	2.0%

血液型 B

赤血球沈降速度 1時間 20 mm

2時間 43 mm

ワ氏反應 (一) 村田 (一) カーン氏反應 (±)

局所所見： (第1圖附圖参照)。

右側乳房部ニ於テ乳嘴ハ凹陷シ，乳暈ニ異常ヲ認メズ。乳暈ニ接シ，其ノ内側ニ2錢銅貨大，不整圓形ノ潰瘍存シ，其ノ底面ノ上半部ハ鮮赤色ノ肉芽様組織ナレド下半部ハ黃白色ノ苔ヲ被リ，潰瘍邊緣ハ限界明瞭ニシテ聊カ皮膚面ヨリ堤防狀ニ隆起ス。別ニ惡臭ナク肉芽様組織ヨリハ容易ニ出血ス。觸診スルニ潰瘍邊緣及ビ底面ハ硬靱，鳩卵大ニ觸レ移動性少ク壓痛存ス。灰白色苔ノ下ヨリハ漿液性膿汁排出サル。乳嘴外上部腫瘍ハ鷄卵大皮膚面ヨリ隆起シ，同様硬靱，表面凹凸不平，基底トハ移動性ナルモ，皮膚ト一部癒着シ稍々壓痛アリ。境界明劃ナリ。

右腋窩部ニ數箇ノ豌豆大ヨリ大豆大ノ淋巴腺腫脹ヲ認メ尙ホ第2肋間腔ノ高サニテ大胸筋ノ外緣附近稍々隆起スルモ別ニ腫瘍ハ觸診シガタシ。又右側頸部ニ2,3淋巴腺ノ腫脹ヲ見ル。

診斷

以上總括スルニ右側乳房部腫瘍ハ2年前ヨリ成リ急速ニ成長シ，8箇月前ヨリ潰瘍形成ヲ見タ事，又更ニ乳嘴ノ外上部ニ鷄卵大ノ硬靱凹凸不平ノ潰瘍形成ヲ見タ事，次第ニ自覺痛ヲ増シ，上肢ノ運動ニ際シ神經痛ヲ訴フルニ到リシ事，潰瘍邊緣ノ堤防狀ニ隆起シ共ニ硬キ事，腫瘍ハ可成リ下部組織ト癒着シテキル點，尙ホ患者ノ年齢，血液ニワ氏反應陰性ナル點ヲ考慮シ乳癌ナル事ハ殆ド疑フ餘地ナキモ，尙ホ診斷ヲヨリ確實ナラシムルタメ潰瘍底面ヨリ試験的切片ヲトリ「ポリクロームス，メチレンブラウ」ニテ染色鏡檢セシ所，潰瘍ノ極ク表面即チ1—2mmハ單ナル肉芽組織ナルモ表面ヨリ少シ深部ニテ檢スルニ單純癌組織ヲ證明セリ。

手術所見

2月8日局所麻酔ニテ津田教授御執刀ノモトニ紡錘形皮膚切開ヲ行ヒ，上記腫瘤ト共ニ大胸筋ヲ下層ヨリ剝離シ續イテ同側腋窩清掃ヲ行ヒ，皮膚縫合ヲ行ハントスルモ創面大ナルタメ腹部皮膚ニ減張切開ヲ施シ所謂「ハイデンハイン」ノ成形術ヲ行ヒ，1次的ニ皮膚縫合ヲナシタルモ1小部ノ創面ヲ殘シタリ。

術後經過

創面ハ化膿スル事ナク術後11日，12日ニ授絲ヲ終リ經過順調ナルモ，唯創緣1小部壞死ヲ來シ術後37日ニテ殆ド全治退院セリ。

切除標本

乳房腫瘍ハ潰瘍トナリ小鷄卵大，不正圓形，稍稍扁平ニシテ灰白色ヲ呈シ硬靱ナリ。乳嘴外上部腫瘍ハ鷄卵大，卵圓形凹凸不平，硬靱ノ腫瘍ニシテ前述ノ乳房腫瘍ト小指大ノ索狀組織ニテ相連リテ共同セル1箇ノ腫瘍ヲ形成セリ。

切斷面ヲ見ルニ粗大ナル結締組織纖維束不規則縱橫ニ走り該腫瘍ハ皮下脂肪組織中ニ沿ヒ埋没サレタルガ如キ形ニシテ周圍脂肪組織トハ比較的明カニ境界サル。唯皮膚竝ニ大胸筋ニ接スル部合ノミ

ハ其ノ境界不鮮明ニシテ浸潤的發育強ク、爲メニ表皮ハ硬化ス。又大胸筋筋膜及ヒ筋肉組織ノ淺層ハ浸潤性ニ犯サレテ腫瘍ト癒着セルモ、深部組織ハ殆ド健全ナリ。腋窩淋巴腺ハ數箇ノ豌豆大腫脹ヲ認メタリ。

組織學的所見 (第2圖, 第3圖附圖參照)。

各腫瘤ノ「バラフィン」包埋標本ヲ「エオジン、ヘマトキシリン重染色」ヲ施シ鏡檢スルニ、細胞巢ハ管狀ニ或ハ小葉狀ヲ呈シ、其ノ間ク略ボ同量ノ結締織ガ不規則ニ走り、細胞ノ核ハ一般ニ「クロマチン」ニ乏シク、其ノ大イサ大體一樣ニシテ核小體ヲ認メ得。潰瘍面ニ近ク圓形細胞浸潤強ク核分裂像ハ稀ニ之ヲ見ル。所ニヨリ結締織甚ダ豐富ニシテ細胞巢ノ少ナキ所謂硬性癌ノ像ヲ見又或部分ハ之ト正反對ニ前述ノ細胞巢豐富ニシテ之ヲ圍繞スル結締織ノ乏シキ髓樣性構造ヲ見ルモ概シテ單純癌ノ像ナリキ。

第3章 統計的觀察

(1) 男子乳癌ノ頻度

男子乳癌ノ稀有ナル事ハ左表ノ如ク明カナルモ其ノ比率ハ各報告者ニヨリ一樣ナラズ。本邦ニ於ケル發生率ハ泰西ノ夫レニ比シ一般ニ低率ナル感有リ。

報告者	全乳癌數	男子乳癌例數	百分比
Gurlt, E.	1432	8	0.55%
Billroth, Th.	245	7	2.77%
Julius Fessler	11821	167	1.41%
Möhnle	16594	248	1.49%
Schuchhard			2%

報告者	全乳癌數	男子乳癌例數	百分比
順天堂病院	400	2	0.5%
長興又太郎氏	974	17	1.7%
志田原群三氏	125	2	1.7%
岡本繁 (津田外科教室)	80	1	1.25%

(2) 發生年齡

余ノ文獻ヨリ蒐集シ得タ本邦男子乳癌34例ニ就キ、其ノ發生年齡ヲ見ルニ其ノ平均年齡56.6年ニシテ、最小27年、最高81年ナリ。一般癌腫ニ於ケルト同様40年ヨリ69年迄ニ最モ多ク34例中28例ニテ82%ヲ占ム。其ノ内50年代14例ニシテ最モ多ク、次ニ60年代ニシテ10例、次ニ40年代ニシテ4例ナルハ女子乳癌ト聊カ趣ヲ異ニス。男子乳癌ハ女子乳癌ヨリ稍々高年ニ發生スル事多キノ一般ニ認メラルル所ナリ、次ニ諸家ニヨリ發表サレタル平均年齡ヲ表示シ男、女ノ差異ヲ示サン。即チ男子ニ於テハ女子ヨリモ高年ナルコト5年乃至10年ナリ。

報告者	男子乳癌平均年齡
Finsterer	55.2
Keyser	57.0
M. Pinln Neal	57.7
Bryan	50.0
岡 本	56.6

報告者	女子乳癌平均年齡
v. Winiwarter	45.3
Lebert	50.0
Fischer	46.9
Oppenheimer	52.9
横 田	47.9
佐藤次文	50.9

男子乳癌 Von Julius Fessler	41	46	50	60	70	計
	45	50	60	70	80	
	23	35	76	21	21	176

本邦男子 乳 癌	年齢	39 以下	40 49	50 59	60 69	70 以上	計
	例數	3	4	14	10	3	
							34

津田外科 教室女子 乳 癌	年齢	39 以下	40 49	50 59	60 69	70 以上	計
	例數	4	27	13	8	3	
							55

(3) 左右ノ別

腫瘍發生側		例 數
右	側	15
左	側	16
兩	側	1
不	明	2

報 告 者	右	左	左右
Schuchhardt	63	65	3
P. Neal	10	14	/
Gutierrez	51%	45%	4%
松 橋	6	5	/

上表ノ如ク左右ノ發生率ハ各報告者ニ依リ異リ或ハ外傷ト關係多キ右側ニ多シト言ヒ、或ハ左側ニ多シト言フ。又左右同時ニ發生スルハ極メテ稀ニシテSchuchhardtハ131例中3例即チ2.3%ニ之ヲ見 Gutierrezニヨレバ4%ナリト言フ。元來兩側ニ發生スルハ1側乳房ノ淋巴系統ヲ介シテ他側ニ轉移セシモノカ將又各々別個ニ獨立ニ發生スルモノカ區別ハ甚ダ困難ナリ。本邦例ハ僅カ1例ノミ。

(4) 腫瘍發生トリ手術迄ノ期間

2年以下ノモノ8例、夫レ以上ノモノ19例、不明ナルモノ8例ナリ。尙ホ5年以上ノモノ13例、10年以上ノモノ8例、20年以上16例、30年以上ノモノ1例ナリ。即チ腫瘍發見當初ヨリ夫レガ癌腫ナリシカ或ハ又良性腫瘍ナリシカ、之ヲ區別スルコトハ至難ナレ共、コノ統計ヨリ思考スル時最初良性腫瘍ノ惡性變化ヲ想像スルハ容易ナリ。然レドモ其ノ時期ヲ決定スルコトハ甚ダ困難ナリ。但シ其ノ發育模樣ヨリ推定シテ癌腫發生ヨリ手術迄ノ期間ヲ計算スルニ平均15.6箇月ナリ。J. Finstererニ依レバ平均18箇月、Williamsニ從ヘバ29箇月ニシテ女子乳癌ノ平均10.3箇月(Rosenstein), 12箇月(横山健夫), 11.3箇月(佐藤次文)ニ比シ遙ニ長キハ、男子ニ於テハ授乳ノ機會其ノ他乳房ニ注意ヲ向ケル事ノ少キニ由ルナ

ラン。又癭性癌ノ如キ發育比較的緩徐ナルモノ多キ事モ1因タルベシ。

(5) 原因竝ニ誘因

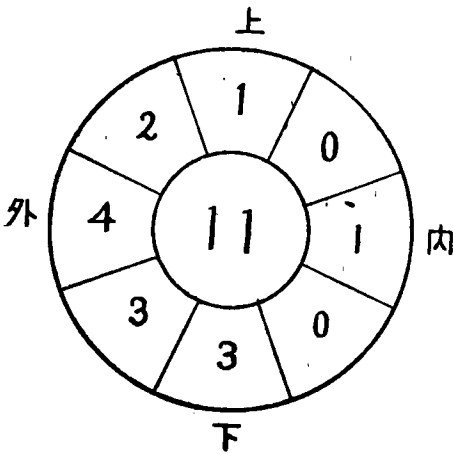
他ノ臟器及ビ組織ニ於ケル癌腫發生ノ原因ト同様ニ未ダ不明ニシテ、刺戟說、迷芽說、炎症說等有リテ一致セズ、併シ一般ニ女子乳癌ノ男子乳癌ニ比シ遙ニ多キハ月經、妊娠、哺乳、月經閉止等ニ依ル內的、外的刺戟ノ乳腺ニ加ハル事ニヨリ説明シ得。茲ニ於テ刺戟說ノ唱ヘラルル所ニシテ、一般ニ外傷ト乳癌トノ關係ハ其ノ報告者ニヨリテ甚シキ懸隔有リ、Williams(44.6%), Sprengel(37.9%), Fessler(21.7%), M. Pinson Neal(8%), Guleke(7.3%)ニ之ヲ證明セリ。大ナル一度ノ外傷ヨリ屢々繰リ返サレテオコル慢性刺戟ノ有意義ナル事ハ明カナリ。現今乳腺炎ト乳癌トノ關係ハ餘リ重視サレズ。本邦ニ於テ外傷ニ起因セシト想像サルルモノ比較的多數ニシテ、志田原忠ニヨレバ56%ニ是ヲ認メタリ。斯ノ如ク本邦ニ於ケル男子乳癌ニ對スル外傷ノ關係ノ甚ダ高率ヲ示スハ症例ノ甚ダ少數ナルガタメナランカ。之ヲ以テ直チニ外傷モ亦乳癌發生上尠モ關係ナシト言フヲ得ザル可シ。又吉田準一郎氏等ニ由レバ高年男子乳腺ニ發生スル非癌腫性硬結ハ吾人ノ考フ程稀ニハ非ズシテ、之等ヲ纖維上皮變化又ハ囊腫性乳腺纖維症ト稱シ、之等高年男子乳腺硬結中ニハ癌腫初期ノ組織像トノ鑑別甚ダ困難ナル場合或ハ全ク不可能ナル場合有リテ之等其ノ大部分ハ眞正腫瘍ニ非ズシテ、內分泌的異調或ハ慢性刺戟ニ基ク老人性退行變化ノ進行中ニ起レル一種異常ノ退行變化ナラン。又本邦男子乳癌ハ良性腫瘍ノ癌性變化ヲ思ハシメル症例可ナリ多數ニ存スル事ハ前述セシ如シ。要之、男子乳癌ノ發生原因モ女子乳癌ト同ジク不明ナリト言ハザル可カラズ。

(6) 局所症狀

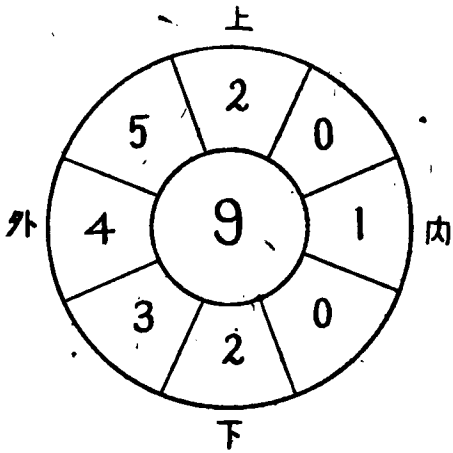
(イ) 乳房ニ於ケル腫瘍ノ位置

初發時硬結ノ存スルハ患者ノ問診ニヨリテ其ノ發生部位ヲ想像スルモノナルガ故ニ確實ナル統計

トハ言ヒ難キモ一般ニ中心部發生最多キガ如シ。



尙ホ診察當時ノ腫瘍ノ位置ハ下圖ノ如ク矢張中心部第1位ヲ占メ次ニ外上部ナリ。



(ロ) 腫瘍ノ大イサ

圖表セシ如ク雞卵大手拳大ノ物最モ多ク指頭大ヨリ鳩卵大ノモノ僅ニ6例ニ過ギズ。之疼痛ノ少

キ爲、又男子ニ於テハ之ニ注意ヲ拂フ機會ノ僅少ナル爲、カク増大スル迄放置サレタルナランモ嚮卵大以上ノ腫瘍中大多數ハ明治時代ノ報告ニ由ルモノニシテ或物ハ醫師ノ誤診ノモトニ切開サレ層發育ヲ促進セシメタル例アルヲ思ヘバ早期診断ノモトニ適切ナル療法ニ必要ヲ痛感スルモノナリ。

(ハ) 皮膚及皮下層トノ癒着及ビ潰瘍ノ有無

男子ニ於テハ皮下脂肪組織ニ乏シキタメ、一方外方ニ向ツテ發育浸潤シ早期ニ皮膚ト癒着シテ潰瘍ヲ作ルコト多ク、内方ニ向ツテハ大胸筋、肋骨肺等ニ浸潤ヲ作ル。Wainrightハ50%ニ於テ潰瘍ヲ形成スト言ヘリ。余ノ本邦男子乳癌ハ80%ニ於テハ皮膚ト癒着シ、下層トノ癒着ハ48%ニ及ビ潰瘍形成ハ46%ニ之ヲ證明シタリ。

(7) 病理組織學の所見

泰西ノ文獻ヲ通覽スルニ硬性癌ヲ大多數ニ於テ證明シ、Williamsハ100例ノ男子乳癌ヲ組織學的ニ檢索セシニ、硬性癌83例ヲ證明セリ。Yamamotoハ90例中50例ニ之ヲ見。Kleinschmidt Gutierrez, J. Fessler等モ亦男子ニ於ケル乳癌ハ其ノ硬性癌ノ多キ事ヲ唱ヘタリ。然ルニMöhnleハ139例中36例ニ硬性癌ヲ證明スルニ過ギズ。又M. Pinson Nealノ統計ニ依レバ髓樣癌最モ多シト言ヒ未ダ其ノ一致ヲ見ザル状態ナリ。

本邦男子乳癌中組織學の所見ノ明カナルモノ30例ニ就キ統計的觀察ヲ試ムルニ其ノ症例ノ寡少ナル爲確實ナル結果ハ得難キモ腺癌11例ニシテ最モ多ク、次ニ硬性癌ニシテ8例ヲ證明シタリ、次ニ諸家ノ統計ヲ表示セン。

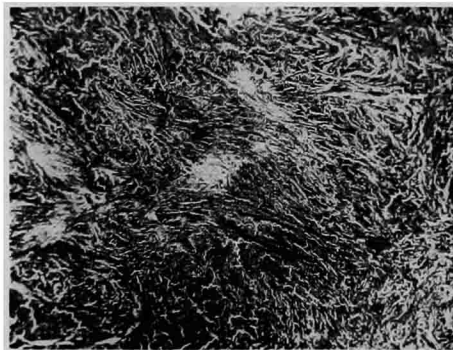
報告者 種類	男子乳癌			女子乳癌		
	Wainright	志田原	岡本	佐藤次文	村尾信俊	Warren
硬性癌	38 49.0	7 1.8	8 26.6	5 10.6	13 25	28 28
單純癌	3 3.7	2 8.7	4 13.3	20 42.5	13 25	26 26
髓樣癌	14 18	3 13.0	3 10	2 4.3	12 23.07	40 40
腺癌	13 16.6	8 34.8	11 36.6	9 19.2	12 23.07	3 3
膠樣癌	3 3.7	2 8.7	3 10	2 4.3	0 0	2 2
乳腺管癌	0 0	0 0	0 0	2 4.3	0 0	0 0
ベージェット	0 0	1 4.3	1 3.3	0 0	0 0	1 1
皮膚ヨリノモノ	7 9	0 0	0 0	1 2.1	0 0	0 0

岡本論文附圖

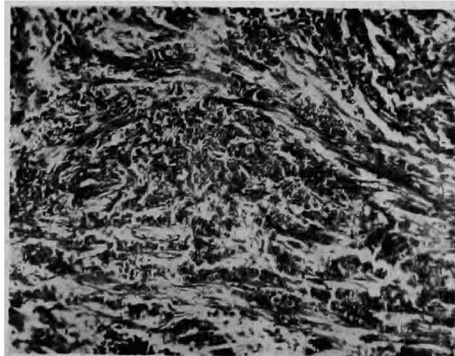
第 1 圖 右側乳嘴内側潰瘍性乳癌
尚々右上部 = 鶏卵大腫瘍存ス



第 2 圖 乳癌組織圖 (單純癌)
(Okul 7. Objek. 5. K.L. 22 cm)



第 3 圖 第 2 圖強擴大 (單純癌)
(Okul 7. Objek. 20. K.L. 27 cm)



(8) 男子乳癌ト轉移

乳癌ハ其ノ發育ニツレテ皮膚ニ浸潤シ、之ト癒着シ遂ニ潰瘍形成ヲ來シ一方内方ニ進ンデハ大胸筋等ト癒着ヲ來スコトハ前述セルモ、淋巴管系統、血管系統ニヨリ種々他ノ組織器管内ニ轉移ヲ起ス。最モ多ク且早期ニ犯サレルハ同側腋窩淋巴腺ニシテ J. Fessler = 依レバ 72% = 轉移ヲ證明セリト言フ。又前胸淋巴腺ヲ犯シ次ニ腋窩淋巴腺ニ進ム場合或ハ前胸淋巴腺ヲ犯スコトナク直ニ腋窩淋巴腺ニ轉移ヲ來スト言フモ本邦乳癌ニテハ後者ノ方多カラシ。又兩者ヲ犯スコトナク直チニ外方ニ進ミテハ外皮ヲ破壊シ或ハ深部ニ侵入シテ大胸筋、小胸筋、肋骨、肋膜等ニ轉移竈ヲ作ル場合有リ、一般ニ乳腺ノ外側及ビ中央部ヨリ出ル淋巴管ハ腋窩腺ニ注ギ、而シテ乳癌ハコノ部ニ發生スルコト最モ多キヲ以テ乳癌轉移ノ腋窩腺ニ最モ多キハ自明ノ理ナリ、然レ共乳腺内側及ビ深部淋巴腺ヨリ出ル淋巴道ハ他ノ道ヲトル事有リ、例ヘバ鎖骨淋巴腺ニ到ル事有リ、又ハ兩側乳腺ヲ結ブ淋巴道ヲ經テ他ノ乳腺若シクハ腋窩ニ至ルモノヲ見ル事有リ、又乳癌ハ他ノ臓器ニ於ケルト同様ニ種々ノ器管内ニ轉移ヲ起スモノナリ。即チ直接血管内ニ進入シテ肺臓ニ轉移竈ヲ形成シ遂ニ全身ニ轉移ス最モ好デ轉移スルハ骨格系統ナリ、脊椎骨大腿骨ハ其ノ好發部位ナリ。

(9) 治療法

女子乳癌ト同ジク乳房切斷ヲ早期ニスル事肝要ナリ。且男子乳癌ハ乳腺良性腫瘍ノ惡性化ヲ思ハス症例ノ多數存スルヲ思ヘバ且以前ニ乳腺良性腫瘍ノ診斷ノモトニ單ナル剔出ヲ受ケタル後ニ乳癌ノ再發ヲ見タル事實可ナリ多數アルニ由リ適確ナル診斷ノモトニ早期ニ根治手術ノ必要ナルハ論ヲ俟タズ。且注意スベキハ手術中屢ハシキ場合ハ直チニ凍結標本作成ヲ行ヒ「ボリクローメス、メチレンブラウ」等ノ染色液ニテ染メ慎重ナル態度ノモトニ之ガ治療ヲ行ハザルベカラズ。

第4章 結論

- 1) 62歳ノ男子ニ來レル右側潰瘍性乳癌(單純癌)ノ1例ヲ報告ス。
- 2) 男子乳癌ハ甚ダ稀ニシテ我津田外科過去10數年間ニ取扱ヒタル乳癌80例中1例即チ1.25%ナリ、一般ニ全乳癌ノ1%内外ノ頻度ヲ有ス。
- 3) 本邦文獻中ヨリ記載ノ明カナル男子乳癌34例ヲ選ビ之ガ統計的觀察ヲ試ミタリ。
- 4) 發生年齡ハ女子ヨリモ一般ニ5乃至10年高年ニシテ50年代ニ最モ多ク其ノ平均年齡56.6年ナリキ。
- 5) 左右ハ凡ソ同數ニ之ヲ證明セリ。
- 6) 腫瘍發生ヨリ手術迄ノ期間ハ2年以下ノモノ8例夫レ以上ノモノ19例、不明ナルモノ8例ナリ。
- 7) 發生原因トシテハ未ダ定説ナキモ良性腫瘍ノ惡性變化ヲ思ハシメタル症例ノ多キコトハ興味アリ。
- 8) 腫瘍ハ中心部最モ多ク大多數ハ鷄卵大乃至手拳大ナリ。46%ニ潰瘍形成ヲ證明セリ。
- 9) 病理組織學的所見トシテハ腺癌最モ多ク11例(36.6%)ニシテ次ニ硬性癌8例(26.6%)ナリ。
- 10) 男子乳癌轉移ハ女子ノ場合ト同様ニシテ同側腋窩淋巴腺ニ最モ多ク且早期ニ轉移ヲ來スモノナリ。
- 11) 療法トシテハ早期ニ根治手術ヲ施スベキハ勿論良性腫瘍ノ惡性變化可成リ多數アルヲ思ヘバ更ニ慎重ナル態度ヲトラザルベカラズ。

摺筆スルニ當リ終始御懇篤ナル御指導ト御校閲ヲ賜リタル恩師津田教授ニ對シ深甚ナル謝意ヲ表ス。

本論文要旨ハ昭和14年6月第5回中國四國外科集團會ニテ演説セルモノナリ。

文 獻

- 1) J. Fessler, Dtsch. Zsch. f. Chir, Bd. 172, S. 429, 1922. 2) H. Angerer, Dtsch. Zsch. f. Chir. Bd. 211, S. 104, 1933. 3) A. Müller, Arch. f. Klin. Chir. Bd. 120, S. 686, 1922. 4) D. Lewis & W. F. Rienhoff, Annals of Surg. Vol. 95, P. 336. 5) 志田原群三, 日本外科學會雜誌, 第36回, 第1號, P. 204, 昭和10年. 6) 女川, 致恩, 臨牀日本醫學, 第7卷, 第3號, P. 215, 昭和13年. 7) 木林辰三, 診斷と治療, 第24卷, 第2號, P. 283, 昭和12年. 8) 兒玉喜夫, 北越醫學會雜誌, 第52年, 第6號, P. 769, 昭和12年. 9) 野方次郎, 東京醫事新誌, 第3001號, P. 2905 昭和11年. 10) 岡本不二雄, 臨牀月報, 第243號, P. 14, 昭和6年. 11) 內藤桑三, 北越醫學會雜誌, 第34回, 第32號, P. 32, 昭和9年. 12) 山田兵三, 軍醫團雜誌, 第184年, 昭和3年. 13) 木村三郎, 日本外科學會雜誌, 第33回, 第7號, 昭和7年. 14) 橋口憲夫, 日本外科學會雜誌, 第36回, 第2號, 昭和10年. 15) 藤原道純, 慶應醫學會雜誌, 昭和7年. 16) 佐藤次文, 岡醫雜, 第50年, 第3號, P. 775, 昭和13年.

Aus der Chirurgischen Tsuda-Klinik der Medizinischen Fakultät Okayama

(Direktor: Prof. Dr. S. Tsuda).

**Über einen Fall von Brustdrüsenkarzinom bei männlichem Geschlecht
und eine statistische Beobachtung des Brustdrüsen-
karzinoms bei Männern in Japan.**

Von

Dr. Shigeru Okamoto.

Eingegangen am 21. Februar 1942.

1) Verf. berichtet über einen Fall von rechtsseitigen ulcerösem Brustdrüsenkarzinom (Carcinoma simplex) bei einem 62 jährigen Manne.

2) Das Mammakarzinom ist bei Männern eine äusserst seltene Erscheinung, unter den sämtlichen 80 Fällen des Brustdrüsenkarzinoms, welche im Laufe der letzten 10 Jahre in unserer Tsuda-Klinik behandelt worden waren, war nur ein Fall bei männlichem Geschlecht vorgekommen, das macht also 1,25% aller Mammakarzinome unserer Klinik aus. Auch nach manchen, spezifisch klinischen Statistiken weist es eine Frequenz von ca. 1% der ganzen Mammakarzinome auf.

3) Aus der einheimischen Literatur hat der Verf. insgesamt 34 zuverlässige Fälle von männlichem Mammakarzinom ausgewählt und daran eine statistische Beobachtung angestellt.

4) Das vorliegende Karzinom entwickelt sich bei Männern in der Regel 5-10 Jahre später als bei Frauen und am häufigsten im 50., durchschnittlich im 56,6 Jahr.

5) Die befallene Seite der Mamma wurde in annähernd gleicher Häufigkeit nachgewiesen.

6) Die Frist von der Entstehung der Tumoren bis zur Operation betrug in 8 Fällen länger als 2 Jahre und darunter, in 19 Fällen länger als 2 Jahre, in den übrigen 8 Fällen war sie nicht bekannt.

7) Über die Pathogenese ist noch keine Einheit erzielt. Es interessiert uns aber, dass es viele Fälle gab, in denen wir einen Übergang des benignen zum malignen Tumor annehmen müssen.

8) Das Karzinom nahm seinen Sitz in den meisten Fällen im zentralen Abschnitt der Mamma ein und war meistens hühnerei- resp. faustgross. Geschwürsbildung liess sich bei 46 % der Fälle feststellen,

9) Was die histopathologischen Befunde anbetrifft, so wurde Adenokarzinom am häufigsten, d. h. in den 11 Fällen (36,6%) beobachtet, ihm folgte der Skirrhus mit 8 Fällen (26,0%).

(Autoreferat)